

大学初年次のライティング教育において自己表現をどのように位置づけるか

——Elbow, P. (1973). *Writing without Teachers*; Elbow, P. (1981). *Writing with Power*——

森本 和寿

近年、日本国内でもレポート・ライティングの指導が取り沙汰され、「アカデミック・ライティング」という語が喧伝されている。レポートにおける引用や文章構成、論証の方法等、アカデミック・ライティングにおいて蓄積されてきた知が一般化されて普及することは学生、教員、ひいては社会にとっても有益なことである。

一方で、大学のユニバーサル化に伴い、従来の大学像、学生像のままでは高等教育が立ち行かなくなっているのも事実である。アカデミックな文章を書くための引用や文章構成、論証の方法等以前の問題として、そもそもアカデミックなものに限らず、文章を書く能力に欠けている、文章を書く経験に不足している学生が増えるなかで、書くことに直面して学生が抱える困難、教員が抱える困難は、決して遠い世界の話ではない。もちろん、これまでも高等教育は研究者育成ばかりを使命としていたわけではないが、「アカデミックな文章産出方法を教えれば、高等教育での評価に耐える文章が生みだされる」という欠如モデル的な認識では、早晚立ち行かなくなる（あるいは、すでに立ち行かなくなっている）。

日本よりも早く高等教育のユニバーサル化が進んだ米国では、アカデミック・ライティングの第一歩目あるいは一側面として自己表現を重視する立場が、「表現主義（Expressivism）」の名で確立されている。米国の学部教育は、一部のハイレベルな研究大学を除けば、学術的訓練の場であるというよりも、一般教養を保障することを使命とする側面が強い。そういう点では、日本の後期中等教育と共通性を有するとも言える。そのような環境において、学生自身の生活世界や身近なテーマについて書く経験を確保することを唱えた人物として、マサチューセッツ大学アマーست校でライテ

ィングを教えてきたピーター・エルボウ（Peter Elbow）がいる（現在は退職して名誉教授）。書くことにおいて自己表現をどのように位置づけるかについての彼の教育理論・実践は、これからの日本の高等教育におけるライティング教育のあり方にとって示唆を与えてくれるだろう。ここでは彼の主著である『教師のいないライティング（Writing without Teachers）』と『書くことによるエンパワメント（Writing with Power）』¹について紹介する。

1. 『教師のいないライティング』

『教師のいないライティング』は、エルボウにとって初の公刊図書である。1973年に初版が、1998年に第二版が出版されている。一般書として出版された本書は、読者に語りかけるような柔らかい文体の随筆調で書かれている。本書の構成は以下のとおりである。

第2版への序章

- 1 フリーライティングの練習
 - 2 ライティングのプロセス：成長
 - 3 ライティングのプロセス：料理
 - 4 教師のいないライティング・クラス
 - 5 教師のいないライティング・クラスの思想
- 補論 懐疑ゲームと信用ゲーム：知的事業の分析
補論 自分自身へのメモ

本書を貫くキーワードは、「フリーライティング」と「教師のいないライティング」である。

(1) フリーライティング

多くのライティングの授業において「母語話者として期待されているほど、書けるようになっていく学習者はほとんどいない」（Elbow, 1968, p. 115）という問題意識をもったエルボウは、学習者が文章を書く際に手

が止まってしまうことに着目した。彼は、書き手の筆が止まるのは、「意識のなかで言葉が生み出された瞬間と最終的に鉛筆やタイプライターで紙に書くときの間に膨大で複雑な編集作業が差し挟まれている」(Elbow, 1998a, p. 5) からであると考え、アイデア出しと編集が同時並行で行われている点に問題を見出した。書く際に編集が強く意識されるのは、「学校に通うことで……文章を書く際に『ミス』を犯してはならないという意識に取り憑かれて」しまい、「文章を書き始めると綴りと文法のことを常に考える」ようになることに一因があると彼は言う (Elbow, 1998a, p. 5)。つまり、「読み手とは評価を下す他者である」という枠組みにとらわれているために、書く作業の初期段階における発想に意図せず制限がかかり、他者から見た体裁を整える編集という作業に意識が向いてしまっているのである。

文章を生み出す過程と編集する過程を切り離すことで初學者の書き手が文章を書く際に手が止まる状況を乗り越えさせようと考えたエルボウは、フリーライティングを活用した。フリーライティングとは、10 分間 (いずれは 15 分から 20 分間)、止まらずに書き続けることを求めるライティングの練習方法である。急ぐ必要はないが、とにかく止まらずに書き続けることが推奨される。行き詰った場合は「何を言えばいいのかわからない」と書いたり、「最後に書いた言葉を何度も何度も繰り返して」書いたりしてもよいとされている。フリーライティングの「唯一の条件は、決して書くのを止めないこと」である (Elbow, 1998a, p. 3)。そのねらいは、書くことに対する書き手の圧迫感をほぐし、無意識に読み手を想定し、正しくあろうとする書き手の心理的障壁を取り除くことにある。

(2) 教師のいないライティング

さらに、エルボウは教師だけを読み手として書くことの問題性を指摘している。先述のとおり、彼の問題意識の一つとして、「読み手とは評価を下す他者である」という枠組みの中で書き手が書く行為から疎外されることへの懸念がある。彼は、教師によるライティング指導に代替するものとして、「7 人から 12 人のクラス」の少人数クラスにおいて、「最低でも 2 ヶ月から 3 ヶ月の持続的な期間」継続してお互いの文章を読み合い、各々が他者の書いたものに対して感じたこと、

考えたことを交流し合うことを推奨した (Elbow, 1998a, p. 77)。このサークル的な活動には教師も参加するが、あくまで一人の参加者として学生とは対等な関係においてフィードバックを行い、また、自らも文章を書いてくる。これがエルボウの提唱する「教師のいないライティング」である。

以上のような包摂的なライティングの理念と同時に、彼は「教師のいないライティング」におけるルールのひとつとして、エルボウは、毎週一定量以上の文章を書いてもってくることを課している (たとえば、自叙伝を書くクラスの場合、毎週 15 頁を課していた。Elbow, 1998b, p. 282)。

毎週何かを書かなければならない。たとえあなたがとても忙しくても、書くことが何もなくても、たとえあなたがとてもふさぎ込んでいても、何かを書いて、彼ら [読み手] の目を通してそれを体験しようとしなければならない。もちろん、それは良いものではないかもしれないし、満足できるものではないかもしれない。しかし、自分が満足している言葉を、人がどのように認識しているか、体験しているかのみを学んでいると、学習の重要な部分を見逃してしまう。自分が嫌いな言葉に対する反応から最も多くのことを学ぶことができる。書き方を学びたい、自分の気持ちを守りたいと思ってはいないだろうか。 (Elbow, 1998a, pp. 77-78)

このように、『教師のいないライティング』において提示された彼のライティング教育は、画一的に「正しい」とされる文章や書き方を指導するのではなく、個人同士が「この人は何を表現したいのか」を探りながら、書くこと、語ること、表現することを相互に支え合う点で受容的である。それと同時に、他者に自分の文章を読み聞かせてフィードバックをもらうという点で書く行為が個人の殻の中に閉じこもるものではないことを強調している。

2. 『書くことによるエンパワメント』

『書くことによるエンパワメント』は、エルボウにとって 4 冊目の公刊図書である。1981 年に初版が出版され、『教師のいないライティング』同様、1998 年に

第二版が出されている。原著タイトル (Writing with Power) からわかるとおり、『教師のいないライティング (Writing without Teacher)』と対をなす一冊である。本書の目次は以下のとおりである。

第2版への序章

- 1 本質的なこと
- 2 紙に言葉を載せる多くの方法
- 3 修正のための多くの方法
- 4 聴衆
- 5 フィードバック
- 6 書くことがもつ力

『教師のいないライティング』では、学生が教師の指導性から解放された個人として書くことの可能性を前景化されていたのに対して、『書くことによるエンパワメント』は共同体として書くことの重要性を説いている。本書では書くことが社会的・活動的な文脈の中に位置づけられ、個人が聴衆に対して、あるいは聴衆が個人に対してどのように影響を与えるかに焦点が合わせられている。本書を貫くキーワードとして、「エンパワメント」と「声」が挙げられる。本書を通してエルボウは、書き手の言葉が「力」(パワー)をもつことの重要性を説き、そのために書き手の「声」を反映する文章が産出されるようなライティング教育が必要であると主張している。

では、書くことにおける「エンパワメント」とはどのようなものなのか。エルボウは、「言葉が力をもつためには、読み手にフィットしていなければならない」、すなわち「読み手が求める文体か内容のどちらか、できれば両方を与えなければならない」ことを認めつつ、「しかし、言葉の力は読み手に合うようにすることから生まれるという答えには納得できない。読み手が望むものを与えるだけで、本当に力になるのだろうか」と疑問を呈している (Elbow, 1998b, p. 279)。彼は「言葉の力は書き手 (必ずしも読み手とは限らない) に何らかの形でフィットすることから生まれる」と主張しているのである (Elbow, 1998b, p. 280) ²。

エルボウは、あまりにも多くの学生が形式的なミスや不注意によって批判されることを恐れ、委縮した状態で書いていることを問題視していた。彼は、一般的なアカデミック・ライティングの指導において、質の悪い文章が「指導」の名の下に矯正される過程で、学

生が自らの実存に根差した問題意識を見失い、結果として「自分の話す言葉や書く言葉を、内面的な意味ではなく、外面的な規準で判断するようになる」(Elbow, 1998b, p. xvii)、すなわち、教師の評価ばかりを気にして書くようになるという問題状況に陥ると言う。教師の評価ばかりを気にして書くことが、教師の評価に沿う文章を書けるようになることにつながるかというと、必ずしもそうではない。彼はこのことを、彼自身が書くことに苦労した結果、ハーバード大学大学院を去ることになった体験を象徴的な例として示しながら語っている (Elbow, 2000 参照)。

従来の修辞学に基づくライティング教育では、読み手に対して説得的であることが強調されてきたため、書かれたものの成否は読み手に委ねられてきた。しかし、読み手の評価にばかり気をとられると、結果として書き手は自分が本心から伝えたいと思うことを伝えることができなくなってしまう。そこでエルボウは書き手が自分の声に従い、実存に根差して (場合によっては読み手を無視して) 書くことを奨励した³。彼は、書き手が本心から書きたいと思ったものにこそ書き手の声の宿り、読み手に響く文章となると考えていたため、ときとして読み手を無視することが結果的に読み手のニーズに応えることにつながると主張したのである。それはすなわち、読み手を無視することと読み手を意識することという、一見矛盾する二つの主張の間で葛藤することが、文章をよりよいものにすることを意味している⁴。このような彼の主張は、「聴衆を無視することが結果として聴衆に対して最も適応している」と読み解くこともできる (Fulkerson, 1990, p. 425)。

3. エルボウの理論・実践の意義と課題

教師不要のライティングを説くエルボウの主張は、教育方法学領域において教師の役割に一定の価値を見出している筆者としては、かなりラディカルな主張にも思える。しかし、「教師のいないライティング」というラディカルな言葉選びとは裏腹に、エルボウの論をつぶさに見てみると、彼は米国ライティング教育における教師中心の学びのあり方に懐疑的ではあるものの、教師の存在意義を否定しているわけではないことがわかる。教師による積極的介入を嫌ったエルボウではあるが、教師に対する学生の自生的な憧憬や敬愛に基づ

く教師の模倣がライティングの質を高めることを認めている。この点についてエルボウ自身は明言していないものの、彼が構想した書き手の共同体は、高等教育（少なくとも彼が生きた時代の米国高等教育）における書く営みが権威主義的な教師の絶対評価と断片化したスキル指導中心になっていたことに対して、一種の認知的徒弟制度を提起するものであると解することができる。

また、初年次教育における自己表現を強調するライティングについても、身近で個人的な関心に拘泥することや学術的訓練がなおざりにされることへの違和感から疑問の目を向けたくなるが、彼が編集したライティング教科書を見てみると、個人的で私的なことに端を発する自己表現から始まってリサーチ・ペーパーを書くことまで段階的に導く單元構成が示されており、決して社会的・公的なことや学術的な観点が疎かにされているわけではないことがわかる（森本, 2020 参照）。

一方で、彼の提起した理論と実践が一般化されるとしたら具体的な授業レベルにおいてどのように実装されるのか、そもそも高等教育におけるライティング指導の目的は何か（自己表現やケアを含み込むものなのか）については、米国においても論争的であり、議論の余地が大に残る。

このような課題を残しつつも、既存のライティング指導が文章を書くことから学生を疎外し、遠ざけているというエルボウの問題提起は極めて現代的である。彼は、「学生が書けないのはアカデミック・ライティングについて教えられていないからであり、これを教えればよい」という欠如モデル的な問題の捉え方に対して、「そもそもアカデミック・ライティングを実現するための前提となる経験やケアの関係、学習共同体のデザインが不十分なのではないか」という新しい観点を提示している点で意義が大きいと言えよう。

参考文献

- ・ Elbow, P. (1968). “A Method for Teaching Writing.” *College English* 30.2, 115-125.
- ・ Elbow, P. (1998a). *Writing without Teachers*. Oxford University Press. (Original work published 1973)
- ・ Elbow, P. (1998b). *Writing with Power*. Oxford University Press. (Original work published 1981)
- ・ Elbow, P. (2000). “Illiteracy at Oxford and Harvard: Reflections on the Inability to Write.” *Everyone Can Write*. Oxford University Press, 5-27.
- ・ Fulkerson, R. (1990). “Composition Theory in the Eighties: Axiological Consensus and Paradigmatic Diversity.” *College Composition and Communication*, Vol. 41, No. 4, 409-429.
- ・ 森本和寿 (2019) 「米国大学初年次における表現主義に基づくライティング教育：ピーター・エルボウの理論と教科書の分析」『教育方法学研究』日本教育方法学会, 45 巻, 37-47.

註

¹ *Writing with Power* という書名で用いられている「パワー」とは、個人や集団がもっている潜在能力のことを指し、エルボウはこれを発揮させることを目指していたことから、本稿では『書くことによるエンパワメント』と訳した。

² このようなエルボウの主張の背景には、卓越した文章には「声や（学者の間では忌み嫌われている言葉だが）リアルさ (realness)、真正性 (authenticity)、偽物ではないもの (non-fake)」が含まれているという彼の思想があった (Elbow, 1998b, p. xx)。書かれたものに声や真正性等を求めるのはロマン主義の系譜に位置づけられる表現主義のライティング教育の特徴であり、この点において彼はロマン主義者、表現主義者であった。

³ たとえば、筆者が所属する研究室では学部生向けの基礎演習科目において配布するレジュメの裏面に「コラム」として大学院生有志が散文を書く試みがなされている。そこでは大学院生が研究において悩んでいることや最近関心をもっていることが綴られており、書き手の声や実存が反映された文章になっている。演習における発表内容そっこのけでコラムを熟読する者もいるように、たしかに読み手を魅了するものになっている様子が伺える。これはインフォーマルな取り組みではあるが、エルボウが実践してきたライティング教育とも通じるものがあると言えよう。

⁴ このような逆説的な主張は、彼の理論の特徴のひとつである。このような特徴は、彼の著作のタイトル『相反するものを抱きしめて (*Embracing Contraries*)』にも象徴的に表れている。

(日本学術振興会特別研究員・博士後期課程)

受理 2021 年 2 月 25 日